

1993/1 No.11

aaqa

日本建築美術工芸協会



CONTENTS

交番建築

武者英二……………1

時代の華一輪

池田直樹……………11

坂上みつ子……………12

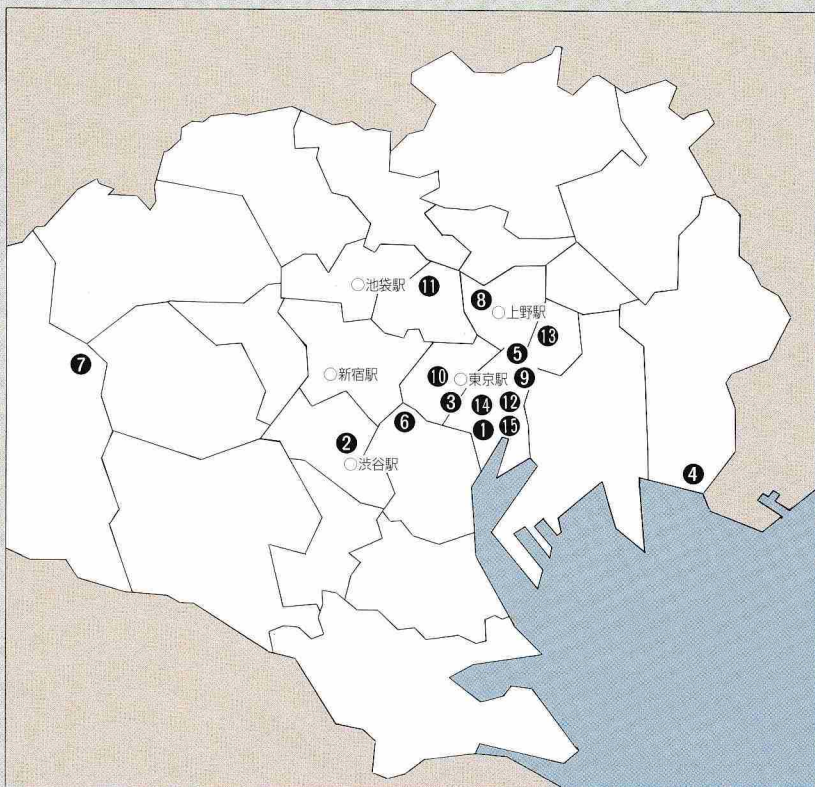
私の近況

横尾龍彦……………13

栗又功雄……………13

TOPICS……………13

■表紙写真：上野署 動物園前派出所



- ① 筑地署 数寄屋橋派出所
(設計：山下和正建築研究所)
- ② 渋谷署 宇田川派出所
(設計：鈴木エドワード建築事務所)
- ③ 丸の内署 日比谷公園派出所
(設計：横川設計工房)
- ④ 葛西署 臨海公園派出所
(設計：MIA建築デザイン研究所)
- ⑤ 中央署 日本橋派出所
(設計：日建設計)
- ⑥ 赤坂署・四谷署 迎賓館前警戒ボックス
- ⑦ 武蔵野署 境南派出所
(設計：石井和絨建築研究所)
- ⑧ 上野署 動物園前派出所
(設計：デザインリーグ)
- ⑨ 久松署 水天宮派出所
(設計：田中建築事務所)
- ⑩ 麹町署 半蔵門派出所
(設計：芦原設計研究所)
- ⑪ 駒込署 上富士前派出所
(設計：富永謙・フォルムシステム設計事務所)
- ⑫ 築地署 銀座一丁目派出所
(設計：大成建設設計部)
- ⑬ 久松署 東日本橋派出所
(設計：アイ・エル・シー・デー)
- ⑭ 丸の内署 有楽町駅前派出所
(設計：警視庁施設課)
- ⑮ 筑地署 銀座四丁目派出所
(設計：PIAC建築研究所)



法政大学教授
EIJI MUSHI
武者英二
足立区竹の塚2-17-13
TEL.03-3884-1903

交番建築

今、交番建築が新しい。建築デザインの潮流を占う存在になりつつある。「お上の目」としての番所から「市民の安全」へと変貌した交番は、“おまわりさん”“駐在さん”の愛称が本当に似合うようになってきた。そこで、交番建築のニューウェーブを探ってみた。

■交番建築が面白い 交番建築が新しいデザインの潮流を作り出しているのではないかと、気づきはじめたのは1981~5年頃である。銀座・数寄屋橋交差点に出現したトンガリ屋根にレンガのヨコ縞模様の交番(山下和正設計)。漫画に出てくる

囚人服とピエロのトンガリ帽子がダブルでパロディー建築と思っていた。以来、気をつけていると四谷見附の交番(中山繁信設計)が完成した。アルミパネルとガラス、鉄骨のオブジェ風の案内板。コンペで選ばれた作品と記憶しているのだが、華やかに開花したポスト・モダンの色濃いもののように思えた。交番建築が面白い、ひょっとすると、スケール、場所性からして、建築の表現のための実験材料として、最も適切で、アピール性があるのではないかと注視していた。

思えば、新しい発想と時代感覚で登場

してきた若い建築家たちは団塊の世代である。彼等は戦後史のなかで、最も激しい時代の洗礼を受けてきた人たちでもある。'60年安保で挫折した文化人を見てきた彼等は、学園の自由と民主化を旗印のもとに、大学当局と国家権力に立ち向かって行った。その運動はアメリカ、フランスそして西ドイツと世界的な広がりをもたらし、日米安全保障条約改定に反対する国民的運動と呼応して'69年はその頂点となった。団塊の世代('47~'49年のベビーブーム世代で、日本の人口ピラミッドでは同年代の人数が最大となった)がその主役であった。



筑地署 数寄屋橋派出所 (昭和56年)

'70年安保当時の交番はコンクリートの箱型建築を、さらにモチアミと称される鉄筋の格子や建築現場の仮囲いに使われる万能鋼板でガードを固めた。交番の形態は市民を守るというイメージよりも、市民を監視する権力の象徴のように見なされるようになってしまった。

大学紛争、安保闘争の時代は、日本経済の高度成長期でもあり、強いアメリカの最後の時代でもあった。東名高速道路全通('69年5月)、大阪万国博覧会('70年

3月)と国家的プロジェクトが進められ、米国ではアポロ11号が月面到着し、人類が初めて月の表面を踏む('69年7月)といった地球時代から、宇宙時代への移行を印象づけた。そして時間とともに、大学紛争も安保闘争も時代の流れのなかで風化していった。そうした青春時代を過ごした団塊の建築家たちが再び、交番建築という場を介して、警察と関わることになった。おそらく意識したかもしなかったかは別にして、運命的出会いともいえ

る。折しも、警察庁は'72年に発表した「'70年代の警察」のイメージづくりとしてCR(コミュニティー・リレーションズ)戦略を企て、外勤警察活動の拠点として交番は重要視された。警視庁における'60年代脱皮の建設活動が始まったのである。大学紛争、'70年安保闘争が再び警察とまみえ、共闘して市民のための、交番建築をつくり出したところに、新しいイメージがひそんでいたのではと思う。



渋谷署 宇田川派出所 (昭和59年)



丸の内署 日比谷公園派出所 (昭和61年)



葛西署 臨海公園派出所 (平成元年)

■交番の歴史 交番という呼称は、今から118年前の明治7年に東京警視庁ができたときの「交番所」にはじまる。この発想は、江戸時代の「番所」や「辻番所」に由来するものと思われる。番所は江戸時代に陸路、海路といわず交通の要所に設けられ、通行人、荷物、運航船などを監視し、検査、徴税などを行なった。いわゆる関所であり、その建物を番所と呼んでいた。

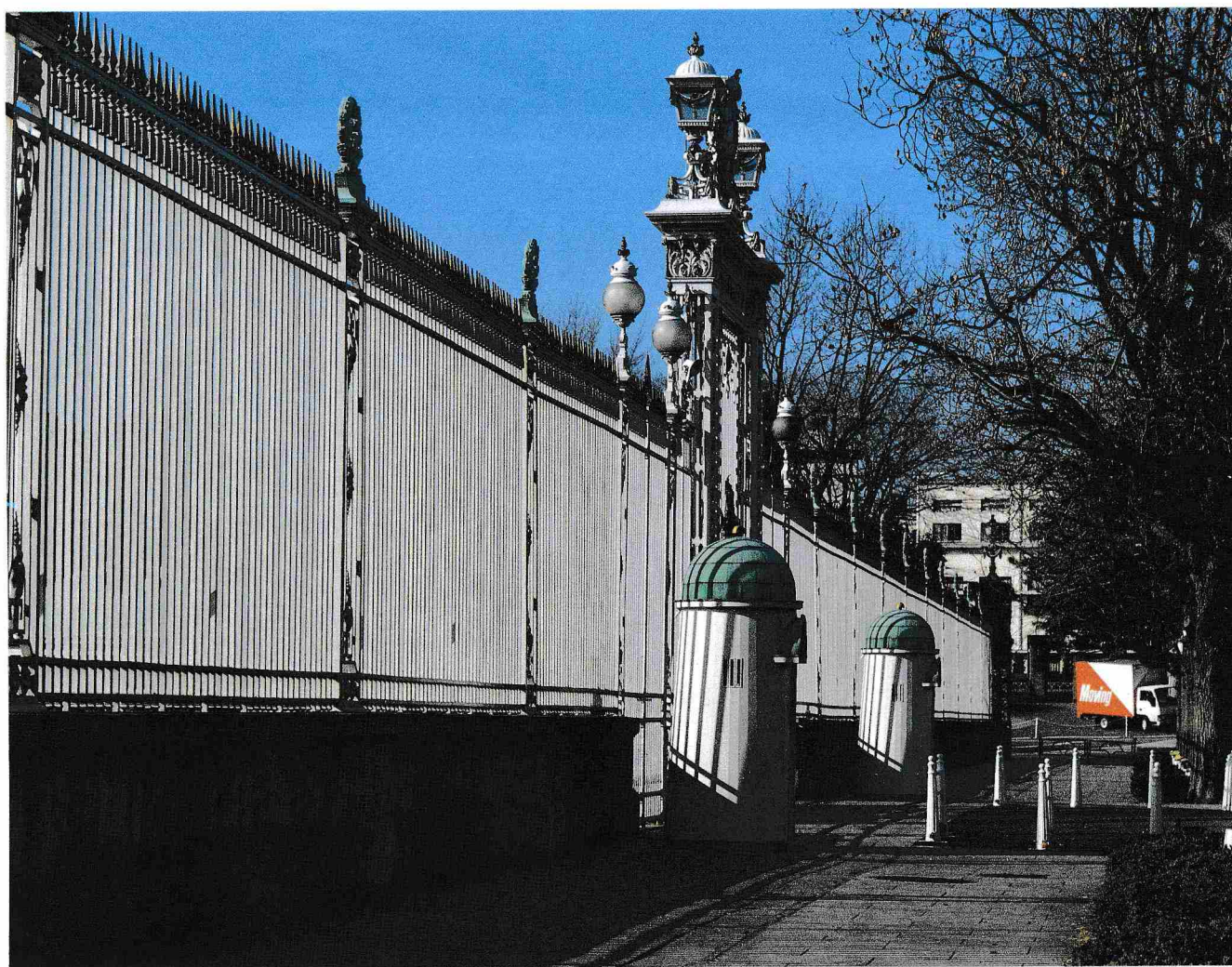
江戸市中では、御番所（町奉行所）をはじめ、番所（江戸城を守衛する目的）、辻番所（武家地の治安維持のため）、橋番所（両国橋、新大橋など重要な橋のたもとに）、自身番屋、木戸番屋（町人地の治安のために各町毎に設置）といった目的毎に序列化された番所が設けられ、江戸市中の治安維持に当たっていた。番所は24時間張り番で、義理と人情、正義の味方（その逆も少なくなかったようだ）、

江戸庶民の涙と笑いに欠かせない舞台装置でもあった。武士から町人まで、好むと好まざるに関わらず、各番所のおかげで世界一安全な都市にいらしていたのである。

明治14年に太政官布告「警視庁職制並事務掌程」によって、全国的に交番制度が確立した。それによると、交番所は駐在所と派出所の総称とし、駐在所は固定した駐在員である外勤の警察官が所属し、派出所には交替で内勤の警察官が勤務することになっている。つまり、交番は警察組織の第一線の建築施設だ。すなわち江戸市中に張りめぐらされた各種の番屋と同様に、都市の治安維持と庶民生活の安全を守るために誕生したものといえる。

小さな施設（10～50㎡位）にもかかわらず、警察組織の機能として大きな役割を果たすことから海外の視察団が来るほどである。このように歴史を持つ交番建

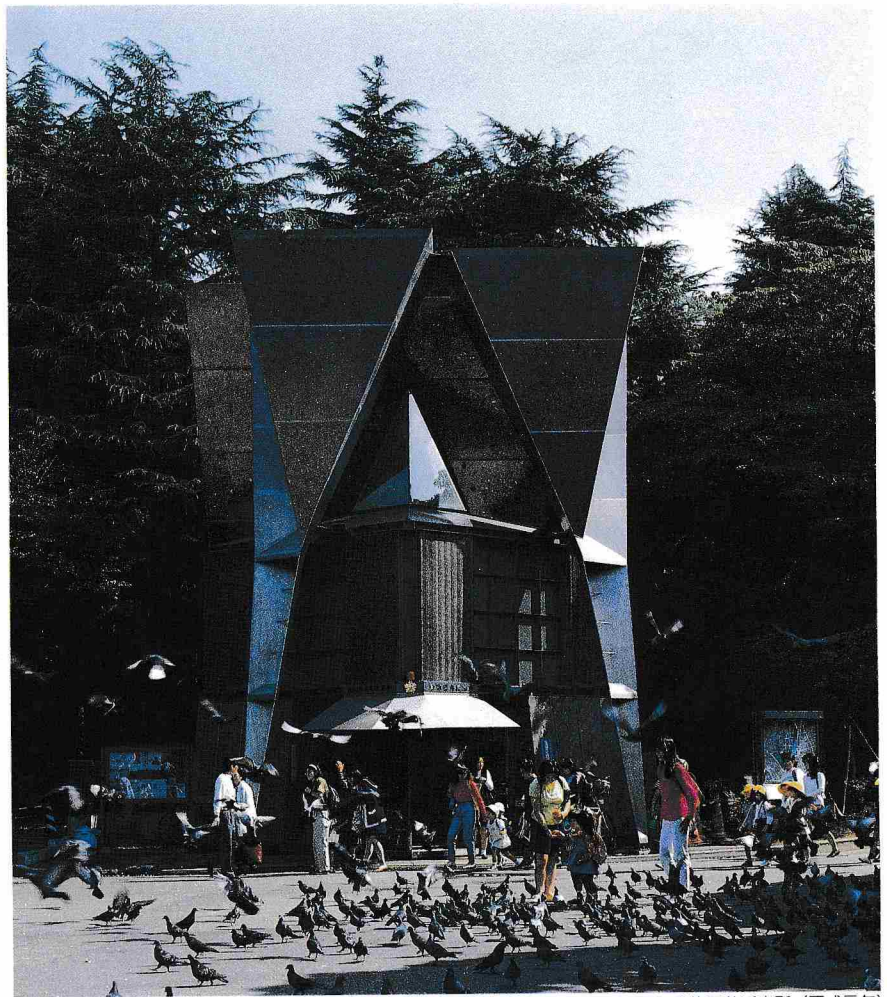
築は世界的に例のない日本独自のものである。交番は国際的にもめずらしい都市施設といえる。



迎賓館前警戒ボックス

■交番の役割 交番の主な任務は、立ち番・見張り・パトロール・巡回連絡・戸別訪問などである。市民のよろず相談所的な役割を果たしながら、市民と警察の日常的な接点として、きわめて重要な機能的な位置づけがなされている。“駐在さん”“おまわりさん”という親しみのある名称も、こうした日常性から生まれたものである。

一方、交番建築のデザインも交番の機能の変化とともに変わっていった。かつての交番建築は良きにつけ悪きにつけ「お上の」「国家の」威信の冠詞を省くことは出来なかったように思われる。江戸幕府以来の形式（目明かしの旦那的監視体制）をとりながらも、近代国家を理想とする明治政府にとって、あくまでも自由と平等、そして西欧に見られる新しい技術の反映としての表現が必要であった。明治時代のレンガ造り、戦前戦後のコンクリート造、そして'60年、'70年安保、大学紛争時代の金網建築と変化をしてきた。交番建築は、いってみれば国家の方針として表現され、配置されてきたとともに、時代の流れ、背景を敏感に受け留めながらつくられてきた。交番建築は最も世相を反映しながらその役割が変化してきたといえる。



上野署 動物園前派出所（平成元年）



久松署 水天宮派出所（平成4年）



麴町署 半蔵門派出所 (平成3年)



駒込署 上富士前派出所 (昭和62年)

■交番建築の現在 交番建築は時代を象徴する表現や形態を生み出してきたと述べた。また、10~50平方メートルほどと小さな施設にもかかわらず、常にその時代の先端的技術と意匠で飾られてきたとも述べた。しかし、今日ほど親しみやすく美しい表現、あるいは少しおどけたような表現に変わった時代はなかった。1972年から始められた警視庁のコミュニティ

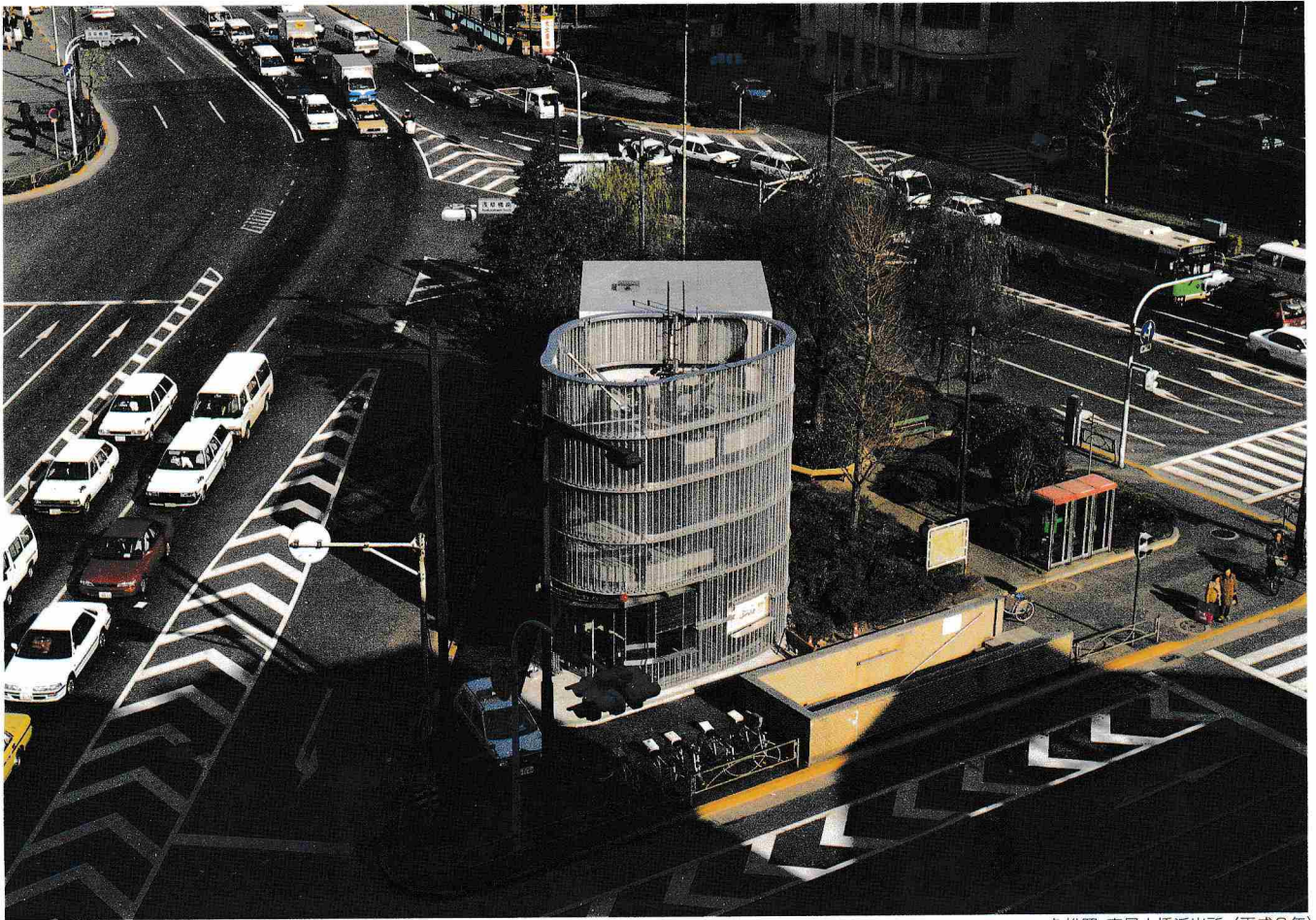
リレーションズ戦略の成果とも受けとれるのだが、本質的に市民と警官との関係が少しずつ変化して来たと考えた方がよいのではないか。動機はどうか、確実に市民サービス、市民の警官の意識の変革と市民のための交番建築、建築文化としての交番建築へと歩み出したのである。その証拠は、かつてのお上による統一した形式を重んじるのではなく、地域

性や環境、公共性を主体におきながら、個性ある表現へと移行している。

これらの新しい流れは、若手建築家の登竜門的コンペや有名建築家への設計依頼で、さらに新しいデザインへの方向に拍車がかかっている。例えば、有料道路とその下のビル化で今日では川面を見ることができなくなってしまった京橋の橋づめに銀座一丁目派出所が建っている。



築地署 銀座一丁目派出所 (昭和59年)



久松署 東日本橋派出所 (平成3年)



丸の内署 有楽町駅前派出所 (平成2年)

タイル張りにとんがり帽子のような屋根で人を惹くが、この形はかつての京橋の欄干のデザインをモチーフしたものである。皇居に面した桔梗門派出所は、千代田城の風景に調和するような和風建築であり、服部時計や三菱ビルのある銀座四丁目交差点の派出所は、隣接する円形のガラス張りのビルと調和するように鏡面の四角い塔状のものである。目立つ、主

張する交番建築から周辺の建築と調和し、移り変わる都市の景観を映しながら街並みに溶け込んでいる。新宿や渋谷、上野、池袋といった盛り場には、そこにふさわしい新しい建築形態が試みられている。街角という人目につきやすい場所に建っていることもあり、今日では現代建築デザインの花形的存在になりつつあることは確実だ。

交番は都内に約一千ヶ所、全国では一万五千余ヶ所もある。これらのすべてが市民に親しみやすい、美しい建築になるのはそう遠くないように思われる。そして、現代建築の行方を占う建築文化的役割も果たしているように思うのは私ばかりではないだろう。



筑地署 銀座四丁目派出所（昭和63年）



声楽家
NAOKI IKEDA
池田直樹
杉並区萩窪1-51-7
TEL.03-3398-5918

人の額には

「人間はひとりひとり額のところにたったひとつの使命が書かれているんだよ。でも何が書かれているかは自分では読むことはできないんだ。だから人間は、誰も自分が何をすべきかを見つけるために、いろんなことをやってみなくてはいけない。何が自分の役目か、何のためにこの世に生まれてきたのか、見つけなければならぬ。」これは、踊る島バリ（PARCO出版）という本のなかに書かれている、グンカの言葉です。グンカとは尊称で、バリ島のガムラン音楽と舞踊を初めて西洋に紹介し、バケ芸能の復興と発展に偉大な足跡を残し、「偉大な父・グンカ」と呼ばれた、マンダラ翁の、最晩年の言葉です。

去年6月、東急文化村・シアターコウーン制作のシェークスピアの「夏の夜の夢・バリ島版」に、初めて役者として参加し、精霊の王・オーベロンを演じ、良い評価を得ました。

宗教曲の独唱者としてデビューし、数多くのオペラに出演し、ドイツ歌曲を愛し、ミュージカルに出演し、オペラをプロデュースし、最近では、演出にも手を染めました。いずれも面白いものですが、憧れのシェークスピアの戯曲に参加できた喜びは、また格別でした。役者としての経験も重ねたいものだと思っています。私の場合いまだに額の文字が読めないのです。

4年前、日本建築美術工芸協会の会で演奏させて頂き、その後のパーティーで誘われ、冗談かと思っているうちに、本当にこの会に入会させて頂いたのですが、これは、とても愉快的な出来事でした。会報の創刊号のサレジオ学園を拝見し、「理想的に文化の成熟した姿だ！」と感激していましたので、入会できることが嬉しかったのです。様々な分野の専門家が、才能を出し合い、素晴らしい仕事をなし遂げるのは、オペラを作る作業にも似ていますが、こうしたプロジェクトが面白いのは、違う分野の人の目の中から、新鮮なアイデアが生まれる可能性が

あることだと思うのです。はたして、このサレジオ学園の場合、なにが起きたのかは分かりませんが、建築、彫刻、家具、祭服、その他一切との、鋭利なやさしさを持った調和に、感激したのです。きっと、このプロジェクトの中で、他の分野の専門家に素晴らしいアイデアを提供したその人の額には、別の使命が書いてあるのかも知れません。

ところで、私も音楽を志すまでは、建築家になりたいと思っていましたから、日本建築美術工芸協会の会員になったということは、最初の夢を果たしたようなものです。勿論、私の額に、建築の二文字が書かれていないことは、確実です。



マイ フェア レディ 第II幕 (ヒギーズ教授)



シェークスピア：夏の夜の夢 第I幕 (オーベロン)



MITSUKO SAKAGAMI

坂上 みつ子

日本電子専門学校コンピュータ・グラフィックス科

専任講師

杉並区高井戸東3-8-5-103

TEL.03-3332-1657

南の島の優雅な生活

花と言えば南の島の花は大きい。色も鮮やかで、生け花の素材として実に魅力的である。問題は花器がよほど大きくないとバランスがとれないという事にある。南の島の中で最も大きな国であるフィジーでは、植物のみならず人間も大きいし、従って手も大きい。そのせいかどうか定かではないが、フィジー産の工芸品は、南の島の中で最も粗雑だという定評がある。恵まれた自然条件の中で、大変におおらか（或いは大雑把）なのかも知れない。

伝統的な建物は高床式で、屋根は草葺き、壁の材料は地方によっても異なるが、一般的には竹の網代で、明らかに日本の伝統と共通するものがあって、椰子の実の繊維の縄で結わえられた小屋組はとても美しい。近年、フィジーの人々も伝統文化を守る事に熱心であるが、建築においては、西欧近代建築とそもそも工法や材料における発想が違いすぎて、色調やパターンを装飾的に取り入れる事にとどまっている。最近、完成した国会議事堂はその良い例で、豪州の建築家の設計だと記憶しているが、草葺き屋根のプロポーションを木製シングルで仕上げているので、どう見てもピラミッドである。

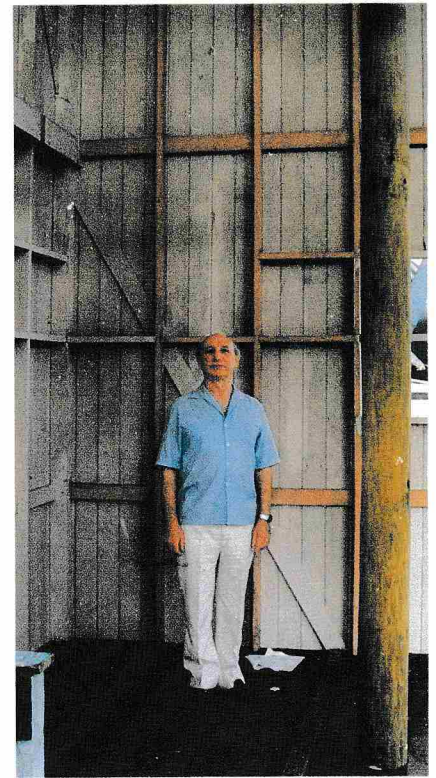
私がフィジーで最も好きな建築は、フィジー在住10年というロバート・オースティン氏の住宅である。その住宅は、一

見ありふれた木造平屋ペイント仕上げだが、よく見ると隅々までデザインされている。地元で一般的に手に入る材料で、地元の大工さんを助手にして、氏自らの改築という事である。氏の工房のコレクションもすごい。日本の豆かなも何種類があったが、これらは氏のお気に入り道具の一つだそうである。広いテラスは木の床で、むしろ日本建築の縁先の空間に近い。その中央に、真っ白なフロアテーブルと大きなクッションを置いてしつらえられた昼食の席は、これぞ南の島の生活の醍醐味(?)と思わせられた。

氏は建築家ではない。英国人で、リーダーズ・ダイジェスト社のデザイナーとして世界をまわり、日本に住まれた事もあるそうなので、私が不勉強なだけで、とても凄い人なのかも知れない。現在は、印刷デザインを本業としているが、こちらでも別の助手が実質的な作業をしていて、氏自身はそれぞれの助手達を指揮してデザイン三昧という、羨ましい限りの生活をしている。また、5年程前から離れを建築中であるが、古材を購入して、乾燥させ、加工して、適材適所に用いている。私は窓の格子について、日本建築の知識からのアドバイスを求められたのだが、私の方が氏の様々なアイデアに感心してしまって、アドバイス等おこがましい限りであった。とにかく、優れたデザイナーの経験と目で、国内産材料である木材の特性を生かしたこの住宅はこれから

のフィジーの建築を考える上ではとても重要な実験であると思う。氏に教育された大工さんが次の世代を育てて行けば、フィジー独自の建築の将来もさらに期待できるのだが、フィジー人の先天的おおらかさを考えるとこちらの方はやや悲観的にならざるを得ない。

何はともあれ数年後、離れの完成祝いに氏を訪れるのがとても楽しみである。





画家・彫刻家
TATSUHIKO YOKOO
横尾龍彦
Niederkollenbach.1 5067 Kurten Germany
TEL.02207-7013

昨年来ドイツの仲間とドイツ現代美術展“自然”を組織、東京、ベルリンを結ぶ巡回展開催に向けて努力しました。佐藤良行協会事務局長のお骨折りで東陶機器のご後援を頂き、かつ国際交流基金の助成、日本建築美術工芸協会、ドイツ大使館の後援でTOTOスーパースペース、ギャラリー山口SOKO、ギャラリー椿の3つの会場でかなりの規模の展覧会を開くことが出来ました。同展はSHI ZENと言う日本語のままドイツを巡回する予定です。それは聞き慣れないSHI ZENと言う言葉の持つ意外性によって人々の注意を集め、引いては東西の自然観、エコロジーの問題にまで思考を促すためです。最近までの科学万能、物質中心的世界観を反省し、自然との共存、シャーマニズムや、瞑想を通して宇宙との一体感を取り戻そうとする意図が籠められています。

同展はベルリン、ボンを巡回し、その他の地方都市でも開かれる予定になっています。このようなグループ活動によって、アトリエに孤立しがちな現代作家は社会にむかって提言することができ、私にとっても彼らと対話を重ねる事によって、時代に対する意識の広がりを持つことができました。独自の創造性と時代に対する哲学的認識にドイツの芸術家は抜きん出ています。我々としてもモードとしての現代美術に倣うのではなく、よりラジカルな視点から国際的場に於ける日本文化の独自性を問はなければならないでしょう。



ISAO KURIMATA
栗又功雄
PT INDOTAISEI INDAH DEVELOPMENT
インドタイセイインダティベロップメント
(大成建設合弁会社)
The Landmark Centre, Tower A, 23rd Floor
Jl Sudirman No.1
Jakarta 12910 INDONESIA
世田谷区大蔵5-18-13
TEL.03-3417-6380

インドネシアのジャカルタに赴任し早くも1年数ヶ月たちました。前回赴任したのは、15年前スマトラのセメント工場のプロジェクトでしたので、今回は2度目になります。以前と比べインドネシアの経済は急速な発展を見せ、特にジャカルタの街並みは大変な変わり様です。メンストリートであるタムリン通り、ステルマン通り、などには高層建築が立ち並び大都会の様相を呈しています。しかし1本裏通りに入りますと昔ながらの住居が密集し、あたかも丸の内のビル街に住宅が混在している、といった感じです。よくインドネシアとは？と聞かれることがあります。一概に言えないことが沢山あります。民族も200とも400ともいわれており、各地方、民族によって言葉や性格や風俗習慣もちがいます。東西5000キロ、南北2000キロ以上ある大島国でしかもこれだけ多くの民族をかかえた国が一つにまとまっているのが不思議に思えます。

このようなインドネシアで私の仕事は700ヘクタールの工業団地を中心とした開発事業です。第一段階として200ヘクタールの工業団地を分譲し、続いて住宅、商業施設、ゴルフ場の開発を計画しております。場所はジャカルタの東70キロ、高速道路を使って市内から50分の距離です。全体で2000ヘクタールの土地があり、他の二つのディベロッパーと共同で、専用のインターチェンジを造りインフラを整備し2000ヘクタールの都市を造ろう、というものです。私の夢は、花と緑に囲まれた美しい工業都市にしたいと思っております。さらに将来はプラス7000ヘクタールの土地が待っており、これから先何年かかるか見当が付きません。山手線の内側で6000ヘクタールと言われておりますのでいかに広いかお分かり頂けると幸いです。

こんな夢を抱きながらジャカルタでの生活をエンジョイしております。インドネシアはとても良い所です。ゴルフ、マリンスポーツ、夜にはカラオケも楽しめます。機会があれば是非お訪ねください。

第2回

日本建築美術工芸協会賞
AACA賞決まる

- の とし ま
●能登島カルチャーパーク
発注 石川県知事 中西 陽一殿
設計 株式会社毛綱毅曠建築事務所殿
- きたみまきむら
●北御牧村芸術むら公園 結いの高欄道
発注 長野県北御牧村村長 小山 治殿
設計 保科豊巳+ベルグ環境設計殿
1992年度協会賞選考委員
委員長 嘉門 安雄
委員 會田 雄亮 委員 小林 治人
委員 栄久庵憲司 委員 三輪 正弘
委員 宮本 忠長
申込期間1992年8月1日(火)~9月11日(金)
応募件数46件 表彰式1992年11月20日

「審査を終えて」
審査委員長 嘉門安雄

昨年度のAACA賞創設第1回に較べて、応募点数は46件と、やや下廻った。しかしこれは、昨年度はこの賞の趣旨、性格が十分に浸透しないままに、応募者も、とにかく提出した、というケースが多かったからであろう。今年度はようやく賞の主旨も理解され、このとにかく提出がなくなった。従って、内容的には昨年度より充実し、落差も少なく、質の高いものになった。

その空気、実状を反映して、審査もまた、かえって長時間を要し、各審査員の忌憚のない意見の開陳は、まさに談論風発一ようやく第1次選考で17点に絞ったものの、最終決定までには、かなりの時間を置くことにしたが、その間に、個人的に1次通過の作品状況を検討し、実際に、幾つかの現地に赴き審査員もいた。さて、最終決定は11月4日に、改めて1件1件に全員の意見開陳を求めることからスタートし、賞候補から一旦は外したものの、再び取り上げて熟視、熟慮するなど、敢えて投票方式をさけて討議した。

そうした討議の中から、最終的に残ったのは、応募番号No20「能登島カルチャーパーク」、No33「ふれあいー東京都マンション向陽台団地モニュメント」、そして、No47「結いの高欄道」の3件である。

しかし、この3件から、どれを選ぶか、となると、それぞれに性格が違っているので、いわゆる優劣はつきかねる。それぞれに

特色をもっている。

やむなく、昨年度はAACA賞のほか
に第2部門として特別賞があったが、今
年度からAACA賞のみにすることにし
たのを楯(?)に、AACA賞を2件とす
ることを協会に進言することとして、3
件中の2件を選んだ。それが応募番号「No.
20」と「No.47」である。

以下は私の個人的感想に過ぎるかもし
れぬが、No.20は1つの快い夢を与える脈
動をもち、また環境との響き合いもいい
一方、No.47は健康な素朴性とともな一種
の感動性がある。仮に文学の世界にたと
えると、一種のドラマである。その点、
惜しくも大賞からはずれたNo.33は、成熟
度、まともは抜群だが、いわば、すぐ
れたエッセイの豊かさであり、快さであ
る。結局、最後まで自問自答を繰り返し
ながら、私もまたNo.47に落着かざるを得
なかった……。

會田雄亮

本年の協会賞は応募作品も増え、また
質の高いものが多く選考自体非常に張り
合いのあるものであった。

受賞作品の一つ“能登島カルチャーパ
ーク”だが、これは立地と云い内容物の
優秀さに負う点も大きい、ガラスと云

う条件にしばらくこれだけ徹底した計画に
は一種の迫力を感じさせ、やはり素晴し
い結果を生み出している。

また、もう一つの作品の北御牧村の“
結いの高欄道”は非常に意欲的な作品で
ある。

最近、地方都市では橋の欄干は町の個
性を出す一助として色々デザインされた
ものが多く作られているが、どの一つを
取っても見せ物的性格を出るものではな
い、ところがこの保科さんの作品は欄干
一つで自然空間に独自の美的環境を作り
出している点、特筆すべき点だと思う。

以上、今回は2点が受賞という結果に
なったが日本建築美術工芸協会と云う巾
の広いスタンスを持つ団体の両極を表わ
す感がして、かえって絶妙な選考であっ
たかな、と私自身は満足している。

「審査と課題」

小林治人

AACA賞も今年は第2回ということ
もあり、応募される側も、審査する側も
「芸術的環境」の作品についての理解度
が前進したように見受けられた。

応募作品の多くは、すでに広く社会にそ
れぞれのメッセージを発して、大変ポピ
ュラーになっているものであり、すぐれ
た作品群に接することができるというこ

とは率直なところ大変楽しい経験である
(審査するという義務が伴わなければも
っと……)特に2次審査に残った12点の
作品について、それぞれ審査員同士で意
見交換をしながら消去法によって3点の
作品が選ばれた。①審査員の一人から絶
叫しているようだと評された「能登島カ
ルチャーパーク」能登島ガラス美術館を
中心に、新しいガラスの都市づくりを目
指し、四神相応を現代に再生しようと、
建築における4つの分棟方式4つの丘を
持つ屋外展示庭園、洋と和の出会い、東
西文化交流の基地、として14基のガラ
ス彫刻等が能登の大地に力強く根付いて環
境と芸術の一体化されたさまがうかがえ
た。

②芸術作品としての彫刻が、日常の場
である団地の階段に一体となって配置さ
れた「ふれあい」東京都営マンション向
陽台団地モニュメント、完成度が高く安
心できる作品との評がほとんどであった。
スケール感が多少気になり……。

③文化への理解ということ最近日本の
各地の道路・橋などで芸術的活動と試
みが盛んになってきている。このような傾
向自体は喜ばしい事と受けとめられるが
習熟度、不釣り合い、わざとらしい目障り
など、むしろマイナスのイメージに連
なるような事例も多い。そんな中で、本
格的デザインがなされている「結いの高
欄道」浅間山を望む風景の中に良い意味
で強力なインパクトを与えているといえる。
このような作品例は、今後全国各地に類
似の空間を有している。建設省道路局を
はじめ多くの関係者への美しい風景づ
くりの広がりのある空間のドラマづくり
のためのメッセージとして影響力が大き
いと判断できる。ただし惜しむらくは、せ
っかくの芸術作品でありながら車道沿
いの直線の縁石、路面の舗装材など従来
の道路構造そのままであり、せっかくの
芸術性の高い高欄の着地環境として問題
が残る。このことについて作者のデザ
イン対象外のこととして受けとめるので
なく、芸術と環境の融合化、統合化への
課題としてこれを意識的にとらえ公共
施設との調和をはかるために道路その
もののあり方について関係者と共に考
えるのに最適の事例であると判断され
る。

以上3点から1点に絞ることは大変困
難であったがスケール感、社会へのイ
ンパクト、AACA賞の今後のあり方など
議論した後、①と③の2点が選ばれた
ものであった。



AACA賞受賞者と芦原会長

今年の審査を通して交わされた意見の中に巷では、文化、文化、といたるところ彫刻などが人目につきやすいところに過剰なくらい配置されたり、建物は立派であるが彫刻などと不調和で全体の美が損なわれている。建物と外構の処理の一体化、総合美の追求が不十分、人間的でやさしいこと、ぬくもりの感じられる作品も数点あったが、環境とのスケールの違和感、作品からの独自のメッセージが弱い、庭園などの作品には、作者の独自の思想が反映し、知の集積した場としての庭のイメージがほしい、などなど審査員は応募された作品がすぐれたものばかりなるが故に、苦痛に耐えて意見を出し合い今年のような結果になったことを審査員の一人として記しておきます。

この賞も回を重ねる度に骨太で、総合的な視座を持った作品が多数応募されるために審査も益々慎重にきびしいものとなっていかなざるを得ないかもしれないが、その結果が日本の環境へ強力なメッセージとなってインパクトを与えられるような結果の公表の仕方が工夫されなくてはならないと思う

栄久庵憲司

建築的レベルと環境的レベルの二点が

賞の対象になったことに今回の意義と特色を感じた。優秀建築、優秀工芸、優秀美術を評価する審査会の多々ある中で建築工芸美術協会の審査はそのトータルでなくてはならない。他の審査と自ら視点が異なることは当然とは言えなかなか難しさがある。何もかもまとめて結構と言いたいところだがそうもいきまい。エントリーの名前を見るとまとめ役とかコーディネーターとか、プロデューサーとかでレジストされているところが興味深い。建築に工芸が機能し、美術に建築が機能し、はたまた建築に美術が機能せねばなるまい。組み合わせは無数にあるがどれも相互に助け合っこそ建築美術工芸という新機軸があるというものだ。地域を視野にいれた環境のレベルではなおさらである。数多いオブジェ（物体）が相互に絡みあってそこから醸成される美的、論理的価値があっこそ評価されるからである。今回の二点にはその可能性が含まれていた。

「能登島カルチャーパーク讀」———
三輪正弘

今年の10月1日、研修旅行の学生達とここを訪れた。主目標は能登島ガラス美術館にしばられていた。穏かな海を渡ってくる風は、昨夜たっぷりと和倉温泉で味わった塩湯の感覚から離れて、爽やかに乾いていた。その日の優しげな斜面に

位置する建築は、建築家毛綱の主張している東洋的な四神相応の構え、そして自然と人工を共存させる地勢学を観るといよりは、ある種のパーバリズムに突き動かされた饒舌な造形言語がいくらか目ざわりでさえあった。

だが、いったん内部にはいると、展示作品の分節の階調が建物の分節と共鳴し合っ何ともいえぬガラス造形のもつ固い重さや膨らみの軽さが、さらには表面の反射と透過による光の連鎖が、深くこちらを魅了するのであった。外部の荒々しさは内部空間においてはすっかり声をひそめ、流動と停滞の波形がすばらしい。

あらためて外に出て全域を眺めると、この建築の構えの分離と結節は、寒い冬の吹き荒れる海に対したとき、おそらくその骨相が際立った造景性を発揮するのではないかと思われ、その中に蔵されているガラスの作品たちがいよいよその本性をみせるのではないかと想像されるのだった。

カルチャーパークは、施設としても、また活動としても多くの未成部分を残している。充実への期待がまた、多くの楽しみを抱かせるのだ。

「芸術むらの高欄を推す」

この長大な手摺は、今回のAACA賞の審査において、いちばん論議の対象となった作品であった。

たぶんそれは、モダニズムやポストモダニズムが繰返されている環境造形の節



瞞からはみ出しているばかりか、たぶん現在の美術評論の文脈などまるで無関心な、もっとどぎつくいうと、より根元的な非合理性が出発点となった作品であったからにちがいない。

だから冒頭にあげた、「いちばん論議の対象になった」というのは、実のところ主客転倒であって、この作品が、われわれ審査員に、「ACA賞とはいったい何だろう」という論議までさせたのだと言うべきだろう。

そしてこの無垢の作品のもつエネルギーが、この橋の道を基軸として、未だ見えていない芸術村全体の指針となる可能性を、われわれはここに見たのである。そしてまた、能登島が意識されたパブリズムだといってよいなら、これは意識以前のそれであるというほかはない。

「その他の作品から」

彫刻家速水の環境との取組は、次第にその確度を増し、視覚よりむしろ触覚へ、「場」をあげつつあるが、今回の○○○○は、その意味におけるすぐれた作品であった。集合住宅へのゆるい階段広場のリズムをゆったりとつくり出し、彼の造形形態の唯一といってもいい扁平長楕円の石の単体が、手摺が広目の階段をふたつに分離するように置かれただけで、その様相を一変させているところが秀逸で、その抑制されたなだらかさ非凡なのである。

「審査所感」

宮本忠長

最終選考に残った9点は、それぞれ水準の高い作品です。

なかでも、《能登島カルチャーパーク》は、ACA賞にふさわしい魅力ある作品です。

また入賞は逸したものの、《目黒雅叙園》は、絢爛たる庶民性と江戸文化を想わせて復元の諸制約を超越して圧巻です。らでん工芸の極致のように、人のこころを楽しませてくれます。建築美術工芸という空間のドラマを演出していると思います。

それと対症的な作品ですが、《ふれあい・都営マンション向陽台団地》の石彫が印象的でした。当り前の場所に、沈黙した石彫が、手摺の効用を果しながら見事です。

ACA賞も、今後回を重ねるにつれ、入賞作品の方向が定まるのでしょうか。(?)

日本建築美術工芸協会 第四回設立記念会+協会賞 表彰式並びに懇親交流会

日時：1992年11月20日(金)

午後6時半～午後8時半

場所：建築会館1階ホール

(東京都港区芝5丁目26番20号)

建築会館。JR田町駅三田口下車、徒歩約3分)

○開場は、午後6時

○協会設立記念会 午後6時半より

(司会：大同元副事業委員長)

○挨拶 会長 芦原義信

○会勢報告

○来賓ご挨拶

○挨拶 会長 芦原義信

○会勢報告 会員増強委員長

古畠誠一

○来賓ご挨拶 文化庁文化部長

田原 昭之氏

○日本建築美術工芸協会協会賞授賞式

午後7時00分より

○賞選考に当たって……(賞選考委員)

○賞の授与(表彰)

○受賞者挨拶+記念撮影

☆休憩(会場準備のため)

午後7時30分～ドリンクサービス

○懇親・交流会 午後7時45分より

○開会挨拶 会長 芦原義信

○アトラクション

独 唱：吉田イサム氏(建築家)

ピアノ伴奏：内山 誠 氏

「太陽のイタリアを唱うーオーソレミオ、カタリ・カタリ他、カンツオーネナポレターナ」

乾杯

1992年4月からの入会者

(正会員・法人会員)をご紹介

散会

1992年山形研修旅行報告

大塚オーミ陶業株式会社

取締役開発部長

玉見 満

aca事業委員会(委員長・中島昌信)による恒例の旅行は、去る10月13日、14日、15日、の2泊3日で実施した。

中島委員長ご夫妻をはじめ18名が参加、13日羽田発、紅花国体終了直後の山形・庄内空港に着き、県下でご活躍中の榎本間利雄設計事務所・本間義衛取締役業務部長の出迎えを受けて山形交通バスで全日程の案内役を引受けていただいた。極めてご多用にもかかわらず誠心誠意の案内に敬服した。

快晴快適の羽黒町の「国宝・五重の塔」を視察ののち、出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)を仰ぎ観る。昼食は紅葉の最上川舟下りの船上で楽しむ、80歳の長老舟頭さんの元気ハツラツの東北言葉、英語、韓国語による川下り民謡で旅情がもり上がる。

俳諧の松尾芭蕉の「清風歴史資料館」を見学ののち、銀山温泉郷で工芸家、伊豆護氏のこけし工房を見学、NHKの依頼で制作した「おしんこけし」の謂れを拝聴なめこ汁で歓待を受ける。源泉館の夕食懇親会の席では女将さん創作の「おしん踊り」で歓迎を受け一同胸襟を開いてのひと時をすごした。

翌14日は晴天、早朝銀山温泉の街並みや籟音の滝を視察ののち、河北町の「紅



風雅の国にて(設計/本間利雄)

花資料館」で矢作春樹氏より紅花油の珍重さ、女性の口紅の尊さ、染織の知恵くらべなどの説明を聴き天童市へ駒を進める。酒造・出羽桜美術館を見学ののちは、童心にかえり、リンゴ・ぶどう狩りを楽しむ、池では人面魚が挨拶してくれた。「風雅の国」で本間利雄代表取締役の出迎えを受け懇切丁寧なご説明を拝聴する。地元出身の院展同人・今野忠一氏の旧家(約100年前)が庭園内に移築され、瀬戸内寂聴尼が来年から住い10年余の歳月をかけて源氏物語を執筆されると聞いてその情熱に驚く。山寺・根本中堂・奥の院の景観を風雅の国の庭園より拝観し芭蕉を偲ぶ。昼食は風雅の国で名物の芋煮会を楽しむ。

建築家・本間利雄先生の代表作のひとつである「東北芸術工科大学」を見学。五十嵐デザイン工学部長と本間先生より詳細なご説明を受けて大変勉強になった。この夜の白布高湯・西屋旅館での夕食懇親会も研修会の満足度も深くなごやかに楽しい歓談の場となった。

翌15日は雨、自然の美しい「小国町庁舎」を見学、今功夫町長を表敬訪問し、高橋睦美助役のご案内をうけ、アートの

一クを随所に取り入れた見事な建築の庁舎を拝見した。

ぶなの路に魅せられながら飯豊山荘に到着、でっかい石魚の塩焼で歓待を受け一同大満足で感謝感激をする。紅葉の温身平・ブナ原生林を見学、森林浴で心身を洗い、大自然の神秘の素晴らしさと、みちのく山形の秋を堪能満喫して帰京の途につき、研修旅行をつつがなく終了しました。

最後に、お世話いただいた関係各位に対し心から感謝の意を表します。ありがとうございました。

道中皆様より寄せられた吟行の句を付記します

雪を待つ 飯豊の草木 色さやか
飯野 毅一
清風に 満月かかる 立石寺
倉本 真弘
うす紅葉 ささ舟下る 最上川
紅葉映ゆ 瀧の籟音 聞きながら
酒井 貢
天上下 楓に映ゆる 最上川
山寺の 苦吟の汗に 秋立ちぬ
大同 元

最上川 月を着に とろり酒
みちのくの 白布高湯に 紅の月
飯豊山 ぶな原生の 紅景色
玉見 満
踏み入れぬ 深山の秋 鹿ぞなく
吉村 忠雄
紅花に 白布高湯 染まりたや
旅はてて 紅葉みちのく 宿番頭
渡部 喜代志

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会
柳澤孝彦(委員長)、宇津野和俊(副委員長)
大多了介、坂上みつ子、崎山小夜子
高部多恵子、玉見 満、

製作協力：㈱SP建材エージェンシー

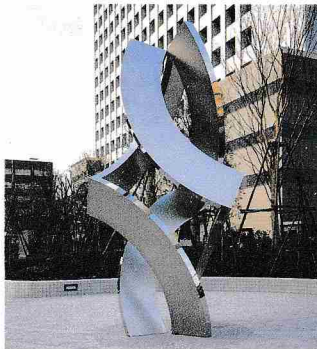
Technology & Craftsmanship

Tajima

ARCHITECTURAL METALS

人と空間とのコミュニケーション。

<田島>は、創業以来75年。日本の建築金属製品の先駆として、数かずの建築に歴史を刻みつづけてまいりました。カーテンウォールからインテリアまで、建築の各分野で有用な金属製品。そして、モニュメントやレリーフなどの建築を取りまく環境造形など。いつの時代にも、時代のテクノロジーを先取りして、高品質の製品をお届けしております。



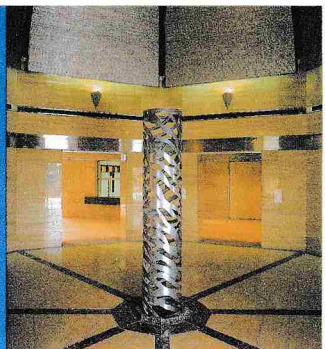
神奈川県警察本部
ステンレス・モニュメント



泉中央土地区画整理事業
ステンレス・モニュメント



J R 荒川沖駅前広場
ステンレス・時計塔



成田市斎苑
キャストアルミ・モニュメント

株式会社 田島順三製作所

本社 〒100 東京都千代田区永田町2-14-3 赤坂東急ビル ☎(03)3581-6291

仙台・横浜・名古屋・大阪・四国・福岡・ロサンゼルス・タイペイ・ホンコン・シンガポール・クアラルンプール・マニラ・ソウル

TAKENAKA
CORPORATION



地球に、学ぶ。

21世紀の私たちの環境を考えると、そのキーワードとなるのは“地球”です。建築の企画・設計分野でも、今、地球規模の広い視野が求められています。生態系(エコシステム)の研究をふまえた企画、そして自然の偉大な造形力から発想する設計……環境の再生と創造をめざして、竹中工務店は地球に学び、着々とその成果を上げています。

創業1610年



竹中工務店

お問い合わせは———総本店広報へ
〒541 大阪市中央区本町4丁目1-13 Tel.06(252)1201
〒104 東京都中央区銀座8丁目21-1 Tel.03(3542)7100